

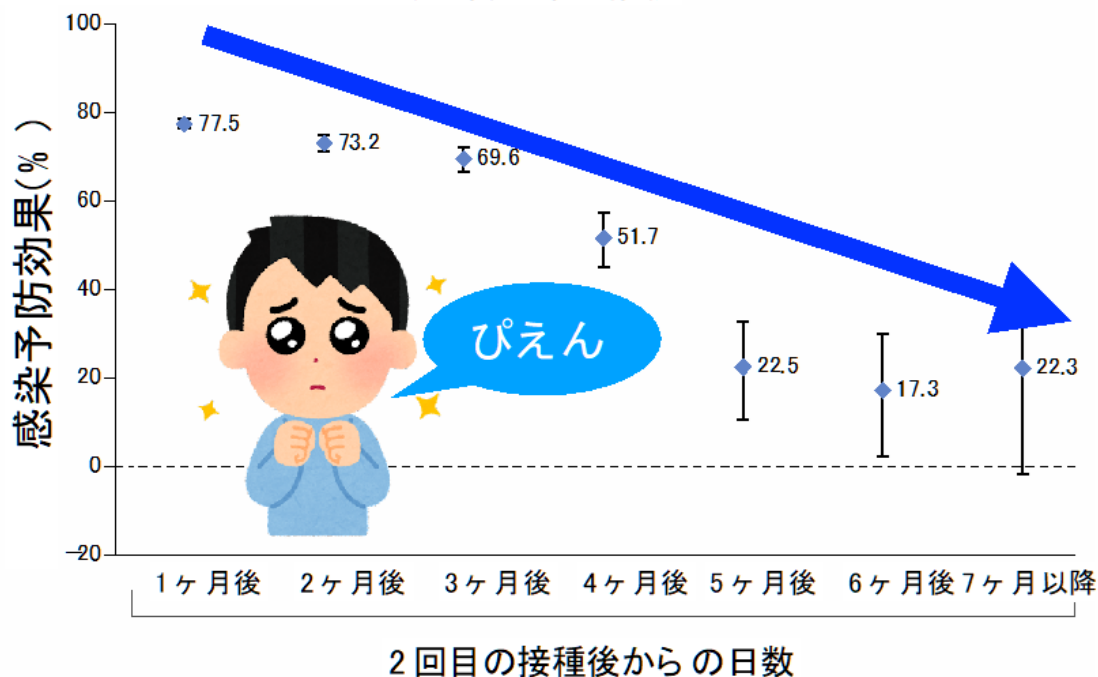
第6波はもう来ない？

6月下旬頃から始まった新型コロナの第5波は、全国では8月20日に過去最多となる25,868人の新規感染者数を記録し、それ以降は減少に転じました。10月下旬現在も、減少の速度は落ちることなく、ついに大阪府内でも1日当たりの感染者数が100人を下回るようになりました。

「もしやこのまま新型コロナは収束するのではないか・・・」と期待してしまうところですが、おそらく第6波は遅かれ早かれ来てしまうでしょう。理由は大きく2つあります。

1つ目は、若い世代でまだ十分にワクチン接種が行われていないことです。第5波はこれまで以上に若い世代が感染者の中で多くの割合を占めていました。活動性の高い人の中で広がりやすいというこの感染症の特性上、この傾向は今後も続くと思われます。この世代でワクチン接種率が他の世代よりも低いことは、まだ国内で流行する余地が残っていることを意味します。

mRNA ワクチンによる感染予防効果の推移



2つ目の要因は、ワクチンによる感染予防効果の減弱です。現在日本国内で広く接種が行われているmRNAワクチンは、接種後しばらくは高い感染予防効果がありますが、時間経過とともに低下してくることが分かってきています。80%以上の高いワクチン接種率を達成しているシンガポールでも過去最大の流行を迎えており、ワクチン接種を完了した人も重症化は防いでも感染そのものを防ぐことは難しいことが分かります。感染予防効果を再び高めるために、現在ブースター接種の必要性が議論されていますが、ブースター接種が行われることになったとして、接種が広く行き渡るまでには時間がかかります。これ以外にも、冬になり気温や湿度が下がると新型コロナが流行しやすくなりますし、行動制限が緩和されれば感染リスク行動にも繋がりがやすくなります。このように、今のまま感染者が減り続けてコロナが収束するというシナリオはおそらく期待できないだろうと思われますので、第6波が来ることは想定しておかなければなりません。

医療従事者として新型コロナに対して気を緩めることなく、引き続き感染対策にご協力よろしくお願い致します。